

The Mill on the Floss と *The Bell* における女性たちの道徳的覚醒

杉浦千秋

Iris Murdoch が好きな作家を挙げるとき、多くの場合その一人に George Eliot (1819-80) の名前がある。発表者は生年、活躍の時代に百年の開きがある二人の作家の比較を試みるなかで、Pricilla Martin が二人の作家の信念・信条について述べている一文に出会う。'For both, the basis of morality is the strenuous attempt to surmount one's natural egotism and to believe in the equal and different being of others.'¹ 本発表は Eliot の四作目の小説である *The Mill on the Floss* (1860) の主人公 Maggie Tulliver と、Murdoch のやはり四作目の小説である *The Bell* (1958) の Dora Greenfield という若い女性たちの道徳的覚醒の場面に焦点を当てて、彼女たちの道徳的成長を検証することにより Eliot と Murdoch の道徳観を考察するものである。

二つの作品には Maggie と Dora が物語の中でそれぞれに啓示を受け、進むべき道の正しい方向を見出す場面が描かれている。*The Mill on the Floss* での Maggie の場合は従妹の婚約者 Stephen と二人きりでボート遊びに出かけたフロス河で、ボートが流されて帰れず駆け落ち状態になる場面でのことである。このまま駆け落ちを促す

Stephen に対して、Maggie は夜明けとともに精神の覚醒をもたらす夢を見る。一方の *The Bell* では Dora がインバーで集団生活を送る夫の元からロンドンへ逃げ帰る。しかしナショナルギャラリーで Gainsborough の肖像画から啓示を受け、現状を変えるためにはインバーに戻らなくてはならないという決心をする場面である。

Maggie は夢に現れた兄 Tom と従妹 Lucy の姿に大切な人びとを裏切ることにはできないと思い至る。その時彼女が思い出したのは、Eliot が伏線として Maggie に読ませておいた Thomas a Kempis の本の言葉、「わたしたちの心の中の神の声に従う」だった。Maggie は Kempis の言葉である「自己放棄」や「放恣なる愛は減ぶ」ことに目覚めるのである。先行研究の多くにこの作品は Maggie の Bildungsroman との見方があることに加えて Avrom Fleishman が「中産階級市民の小説」とであると評するが、まさにヴィクトリア朝ミドルクラスの道徳観の中で生きる人びとを描く Eliot は Maggie を当時の倫理規範から外すわけにはいかない。物語前半では自分の感情が抑えられず少々奇妙な行いをするものの、読書好きで知的な少女として描かれる Maggie が Kempis の言葉から

「自己放棄・自己犠牲」という良心の目覚めによって駆け落ち寸前の状態を克服するのである。

それに対して Dora が画家の娘たちを描いた肖像画と感動的な出会いをしたことについて、Anne Rowe は ‘Dora’s emotional encounter with the painting is a secular equivalent to the kind of religious revelation that many experience in church and gives Dora moral direction.’ⁱⁱ と述べている。Rowe の見解のように絵画との出会いがもたらした啓示は Dora にこれまでの自分本位の唯我の状態を脱するように導く。その結果としてインパー解散の一連の出来事を経た Dora は Michael を責めたり、裁いたりせず自分にできることや自分の役割に没頭した。再び絵を描き始め水泳を習得する。それが自己の能力を正當に評価できることや夫と別れて自立する自信に繋がったのである。さらに *Existentialists and Mystics* における Murdoch の ‘Art and morals are, with certain provisos which I shall mention in a moment, one. Their essence is the same. The essence of both of them is love.’ⁱⁱⁱ という言葉に触れるとき、Murdoch の考える芸術の本質は「愛」であり、道徳も同様であることがわかる。絵画との出会い以降 Dora は短期間ではあるが「自己認識」と「寛容」とを身につける旅、つま

り道徳的な成長をもたらす旅をしたといえよう。

考察結果として、二人の作家が活躍した時代はヴィクトリア朝と第二次世界大戦後というようにイギリスの社会状況には大きな隔たりがあり、急進的哲学の機関誌である *Westminster Review* の編集者という経歴を持つ Eliot は中産階級の倫理観を見据えて物語を進行させ、一方道徳哲学者である Murdoch は高等教育を受けた登場人物たちに生き方の葛藤に答えを探らせる。しかし二人の作家に共通する「真摯な観察、真実を語る」という執筆姿勢で描かれる作品には「愛と救済」という道徳観が通底していると思われる。

注

- i Pricilla Martin. ‘The Preacher’s Tone: Murdoch’s Mentors and Moralists’, Anne Rowe and Avril Horner eds. *Iris Murdoch and Morality*. 35.
- ii Anne Rowe. ‘‘The Dream that does not Cease to Haunt us’: Iris Murdoch’s Holiness’, Anne Rowe and Avril Horner eds. *Iris Murdoch and Morality*. 148.
- iii Peter Conradi ed. *Existentialists and Mystics*. 215.

(会員)